



Title	三島由紀夫におけるセクシュアリティの表象 一同時代の性に関する知を手掛かりに一
Author(s)	Park, Soojung
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76316
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (PARK SOOJUNG)	
論文題名	三島由紀夫におけるセクシュアリティの表象 —同時代の性に関する知を手掛かりに—
論文内容の要旨	
<p>本論文は、三島由紀夫(1925年～70年)の文学作品におけるセクシュアリティの表象を、同性愛と異性愛を中心に引き上げ、同時代の性の知と規範を手掛かりに分析したものである。セクシュアリティという概念は、歴史的・社会的に構築されたものであるという観点に立ち、三島が作品に表現したセクシュアリティと、作品が書かれた時代の権威的・支配的な性愛の知識との関連を掘り下げることで、同時代の性規範を反復する三島の文学作品ないし文学活動を批判的に考察した。研究を遂行する際には、三島の蔵書目録に確認できる性愛関連の書物や文献のみならず、彼が興味を示した雑誌、同時代の新聞記事など、広範囲にわたる資料を掘り起こし、それらが三島のセクシュアリティの表象に与えた影響、そして三島の文学活動と持っている関係性を解明しようと試みた。</p> <p>序論では、三島のセクシュアリティ表象に関連する先行研究を整理し、問題提起を行った。とりわけ同性愛の表象に関する研究では、作品と作者の実生活とを同一視するバイアスがかかり、語り手と作者の距離に重きが置かれる傾向にあることを示した。そこで、三島が同性愛をテーマとする小説を書いた際に参考にした性科学・性欲学書などの存在を浮かび上がらせることで、作中の同性愛の表象が、単に作家の性的指向にまつわるものではなく、同時代の書物や資料、先行する作品を補助線として成立した可能性を提案した。これは同性愛だけでなく、異性愛の表象にも関わる問題である点から、同時代の性の知が、三島の表現した性愛の有様といかなる関連性を持つかを実証的・具体的に探る必要があることを明示した。</p> <p>第一章「『仮面の告白』における同性愛の表象」では、まず、『仮面の告白』が19世紀の欧州において性の真理を創出した性科学のメカニズムと同様に、「告白の制度」の下で達成された文学的な営みであることを述べ、主人公・「私」の告白は、作者・「三島由紀夫」の告白か否かを確認するような論考から距離を置いた。三島のセクシュアリティの表象と同時代のコンテクストとの関係性を探るための基礎作業として、性科学に焦点を当て、とくに『仮面の告白』執筆中に三島が読んだことが知られる、イギリスの性科学者ハヴロック・エリスの『性の心理』を取り上げた。この書に確認できる「倒錯者」の実歴が、両親や家族の身体的・精神的疾患の有無や家庭環境・育ち、幼年期の性的な経験などを記していることに着目し、『仮面の告白』が書き出している「私」の過去は、「性的倒錯」の原因を「素質」に求める性科学書の方法を踏襲していると分析した。さらに、作中、「私」の性的指向は「生まれつき」の「宿命」として語られる点に注目し、三島が『仮面の告白』を執筆していた時期に日本語訳が出されたスタンダーの小説『アルマンス』における主人公・オクターヴの「宿命」、つまり性的不能とそれに連なる社会的な他者認識が、「私」という同性愛者の人物造型に少なからず影響を及ぼした可能性を論じた。</p> <p>第二章「三島由紀夫に見る性科学の受容と変容」では、三島における性科学の受容と、作中における展開を詳細に追った。明治末期から昭和初期にかけて盛んに輸入された西洋の性科学と、それに刺激を受けた日本の性欲学の関連文献・資料が、三島の蔵書目録に数多く確認できることを指摘し、これらの書物から性愛に関わる知識を渉猟した三島が、『仮面の告白』と『禁色』にその知識を盛り込ませたことを述べた。従来の研究では、両作品に性科学の知見が含まれている事実は確認されていたものの、三島がどのような本を読み、その本のどの部分に注目し、また作中においてはいかに展開したかという問題は、十分に調査・考察されてこなかった。本論文では、三島が両作品に引用しているドイツの性科学者ヒルシュフェルトと先述したハヴロック・エリスの著作や学説を特定することができた。また、原典と作中に書かれている引用文を相互比較した結果、三島は原典の特定箇所を誇張して解釈したことが分かった。ただし、『仮面の告白』の場合、同性愛に関する性科学の見解がそのまま語り手の知識として援用されているものの、『禁色』では、性科学が打ち立てた、同性愛を「変態性欲」と見なす言説への皮肉・批判意識が見られるという相違を判明した。</p> <p>第三章「『禁色』における同性愛の表象」は、『禁色』が行っている同性愛言説批判の内実を問うものである。語</p>	

り手が再生産する同性愛への偏見と差別は、読み手が作中の同性愛の世界を「グロテスク」に感じるようにすると同時に、主人公・悠一が同性愛の世界から抜け出て異性愛の世界へ移行する原動力になっていることを論じた。『禁色』では異性愛と同性愛が拮抗する構造が見られ、悠一は同性愛者の世界に触れるにつれて社会を動かす「多数決原理」、つまり異性愛主義に対する反感を表出する。とりわけ妻・康子の妊娠を確認する場面では、「優生学」とそれが支える異性愛主義の盲点が露わにされている。しかし、悠一は異性愛の規範からの逸脱を試みながらも、他方ではその秩序への従属を願う矛盾を抱いており、結果的に異性愛社会へ回帰する。悠一が、康子の出産をきっかけに異性愛主義の象徴である「子供」の存在を肯定し、異性愛の世界において新たな生き方を見つけ出す結末は、同時代の『読売新聞』に掲載された同性愛者の悩みに対する相談内容が導くような、社会における同性愛者の在り方と噛み合っていることを指摘し、『禁色』が反復・加担している異性愛主義を明確にすることで、この小説が行っている性の知に対する批判を懐疑的に捉えた。また、登場人物の檜俊輔の目を通して描写される同性愛の世界が、前近代の「男色絵」に見られる「純潔」、理想化・美化された精神的なものから、「稚拙」、肉体的なものへ転落していくことや、語り手が悠一の内面にフォーカスしながら提示する「グロテスク」な同性愛者の一面を浮かび上がらせ、語りが内包している異性愛主義と同性愛嫌悪を指摘した。

第四章「『潮騒』における異性愛の性規範」では、性科学・性欲学が打ち立てた「正しいセクシュアリティ」の規範に着目し、『潮騒』に反映されている同時代の性規範について考察した。原作『潮騒』と映画『潮騒』の新聞広告に見られる「自然」と「健康」のアピールは、当時の「正しい」男女交際の理想形であったという視点から、『潮騒』の主人公男女の「健康」で「純粹」な恋愛が、「自然と」成立する過程は、このような「正しいセクシュアリティ」観に相応しいものであったと指摘した。作中において、新治と初江が従う婚前純潔思想や、婚姻において重視される配偶者の人格などは、同時代の純潔教育の目標である一夫一婦を基調とした、善良な結婚と次世代の生産に関連している。このような『潮騒』の異性愛は、純潔教育の理念的射る「道徳」「模範」として消費された可能性を提示しつつ、その傍証として『潮騒』の国語教科書掲載を取り上げた。当時、国語教科書は純潔教育の目標を教育する一環として利用された可能性を念頭に置きながら、『潮騒』を掲載している国語教科書とその指導要領書に目を向けた。教科書が重視する「平凡な人間の平凡な生活」を体現している人物こそが、新治と初江であることを示すことで、『潮騒』は異性愛の規範に当てはまる「純愛」を作り出してしまったと指摘した。

このような検討を踏まえ、第五章「三島由紀夫とセクシュアリティのヒエラルキー」では、三島におけるセクシュアリティの表象が、先行する作品や資料、同時代の文脈に大きく負って築き上げられただけに、そこからセクシュアリティに対する時代的・社会的な偏見や差別が読み取られるが、これは単に時代の限界だと片づけられるべきものではなく、作家の限界でもあることを論じた。というのは、三島はアンダーグラウンド文化の切腹願望・切腹趣味に関連する物語を、男性の同性愛を描いた『愛の処刑』と、男女の異性愛を描いた『憂国』という二つの形で表現しており、その書き分けに注目すると、三島が同性愛を「格調低く」、異性愛を「格調高く」表すために重ねた工夫が見えてくるからである。とりわけ注目したのは、三島自らその文章の「格調」に関連付けて言及したオノマトペが、『愛の処刑』には数多く見られる一方で、『憂国』では節約されている点である。そこからさらに、『愛の処刑』が『憂国』に書き換えられた際に付け加えられたジョルジュ・パタイユのエロティシズム論に焦点を当てた。エロティシズム論が、アンダーグラウンド雑誌の『奇譚クラブ』誌上において「エロ」を「芸術的」に昇華するために援用された経緯を提示するとともに、この理論が三島のグラビア写真と寄稿文を掲載している雑誌『血と薔薇』においても、雑誌刊行の名分を立てると同時に、この雑誌が追究するエロティシズムを「高尚」なものとして位置付ける役割を果たしたことを指摘した。三島は『血と薔薇』に、セクシュアリティの様々な形態を肯定する基調の文章を發表しているものの、同性愛者のアイコンである聖セバスチアンの殉教を演じる写真では、エロティシズム論を引き入れて「芸術的」な形でそれを提示しようとしたという観点を提示し、三島にはセクシュアリティに対する階層的で多重的な意識があったと述べた。

最後に結論では、これまでの議論を通じて明らかになったことをまとめつつ、今後の課題を示した。本論文では、三島におけるセクシュアリティの表象を、同時代の性に関する知というコンテクストを通して読み直すことで、三島が受容した性科学・性欲学の知見が、作中に展開・変貌していく様相を明確にした。また、支配的な性規範を反復する三島のテキストから、三島におけるセクシュアリティのヒエラルキーを導出することができた。このような三島の意識構造こそ、様々なセクシュアリティを表現している三島文学の多面性を解きほぐす糸口になると考えられる。

また、付録として三島の蔵書目録から抜粋した「性科学・性欲学・精神分析学・心理学・性愛に関する資料や小説など関連の文献表」を掲載した。この一覧表は、三島が性愛に関する知識を意欲的に摂取した証しであり、今後三島の他の作品に見られる性愛の言説展開について考察する際にも重要な参考資料になると思われる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (朴 秀 浄)			
	(職) 氏 名		
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	橋本順光
	副 査	大阪大学 教授	中直一
	副 査	神戸大学 准教授	梶尾文武
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：三島由紀夫におけるセクシュアリティの表象―同時代の性に関する知を手掛かりに―

学位申請者 朴秀浄

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	橋本順光
副査	大阪大学教授	中直一
副査	神戸大学准教授	梶尾文武

【論文内容の要旨】

本論文は、三島由紀夫の作品にみるセクシュアリティ表象について、同時代ないし先行する性科学や性愛関連の書籍を参照することで、その転用と文脈を『仮面の告白』から『憂国』まで発表順に検討することで明らかにしている。序論は、関連する膨大な先行研究を整理しながら、三島の蔵書目録に性科学に関する書籍が多く存在することに注目し、その影響と転用がこれまで十分に考究されてこなかったとして、企図を明確に規定している。

第一章『『仮面の告白』における同性愛の表象』は、同性愛の「告白」が、作者自身に起因するかどうかという問題を棚上げすることで、語りの歴史的文脈に注目している。その告白の語りが、三島の蔵書にあったハヴェロック・エリスの翻訳書『性の心理』（1927-9）にみる「倒錯者」の実歴と極めて類似しており、「異常」の診断の鍵となるのが手淫の告白であることを指摘している。同性愛指向が性的不能と並行して語られる点については、執筆時の1948年に翻訳が刊行されたスタンダールの『アルマンズ』の主人公との共通点が重ねられると論じている。

第二章「三島由紀夫に見る性科学の受容と変容」は、三島が使用した文献を特定し、その原文と比較することで改変を指摘している。『仮面の告白』におけるヒルシュフェルトと、『禁色』におけるハヴェロック・エリスとを、それぞれ該当する原文を初めて指摘し、前者では聖セバスティアンを特権化するための権威として援用していること、後者では、性科学を権威としてよりも批判的に見る視点があることを明らかにしている。

第三章『『禁色』における同性愛の表象』は、同性愛と異性愛の拮抗に注目する。同性愛への偏見と差別を反復しながらあえて「グロテスク」に描き、「多数決原理」である異性愛主義へと主人公が回帰する一方、その象徴である「子供」の肯定が、結果的に、優生学とそれが支える異性愛主義の盲点をあらわにしていることを指摘している。

第四章『『潮騒』における異性愛の性規範』は、純潔教育の文脈をとりあつかう。異性愛が「自然」のなかで「自然」と成立してゆく『潮騒』は、1950年代当時の純潔教育を踏襲することでむしろその不自然さを露呈させているにもかかわらず、国語教科書などで純潔教育の教材として使われたことを、指導要領など周辺文献を参照することで解明している。

第五章「三島由紀夫とセクシュアリティのヒエラルキー」は、「エロ」と「芸術」の階層を扱っている。「切腹願望・切腹趣味」が現れた二つの作品―『APOLLO』に掲載された『愛の処刑』と『小説中央公論』に掲載された『憂

国』一を比較し、オノマトペの多寡という点で対照的であることに注目している。この階層性は、『奇譚クラブ』誌上における「エロ」を「芸術的」に演出するためにバタイユが援用されている事例、三島が聖セバスティアンに扮した写真を掲載した『血と薔薇』の事例と並行していることを指摘している。

結論では、三島のセクシュアリティ表象が密接に同時代の性科学などの言説と関りあっていることを再確認し、主に男性同性愛について行った作業が、『沈める滝』、『金閣寺』、『音楽』などにみる性的不能や、『果実』や『暁の寺』にみる女性同性愛についても可能であることが示唆されている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、上記の全5章、それに序論と結論、図版と付録を加え、全体で横書き199ページ、本文と脚注だけでも400字詰め換算で約500枚に相当する。4つの章の一部が、査読を経て学会誌に掲載された5本の論文を原型としており、いずれも大幅に改稿されている。

『奇譚クラブ』など公設の図書館には所蔵しない文書を含め、文字通り文献を博捜し、関連の研究はもちろん、英独仏の典拠にあたる丹念な実証と緻密な論理構成は高く評価された。作品内で言及されているにもかかわらず、これまで等閑視されてきたハヴェロック・エリスやヒルシュフェルトの著作を精査し、原文の解釈には異論もよせられたが、初めて原典との比較を行い、転用の過程を指摘したのは、模範的な比較文学研究といつてよいだろう。

スタンダールの『アルマンズ』受容にしても、性的不能な男性を同性愛者として三島が読みかえた可能性については、クィア・リーディングの先駆としてみなすことができ、日本文学におけるスタンダール受容という従来の研究史の点でも注目される。また、こうした読みかえが、『アルマンズ』刊行当時に見られたという指摘も、三島が孤立した事例でないことの証しとなっており、より大きな文脈で読み直す契機となることが期待される。

一方で、性に関する規範が時代によって異なる以上、「限界」を指摘する意味や、異性愛主義に対する作品のアンビヴァレンスが作家個人の問題である可能性を考慮しない点について、疑問が寄せられた。バタイユは『憂国』で援用されているが、禁止の撤廃ではなく、侵犯への挑戦こそ主眼である点についても、十分な考察があつてよかったかもしれない。『潮騒』と純潔教育との関連についても、性科学との関連はやや希薄であったと言わざるを得ないだろう。関連して、『禁色』と『潮騒』の対比は、都会と田園の対比という『椿姫』などの伝統的なヨーロッパの恋愛小説を踏襲していることや、アウトローが市民社会に復帰する構造は、『金閣寺』や『鏡子の家』とも共通していることなどが指摘された。

これらの指摘は、むしろ本研究の重要性と可能性に関わるものであり、今後、本論文から発展してゆく成果に、審査員一同一致して高い期待が寄せられた。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。